

岡山県立博物館  
研 究 報 告  
46

備前焼（彩色備前） 三十六歌仙置物  
—— 池田家旧蔵品の紹介 —— …………… 重 根 弘 和 …… 1

備前東照宮の奉納品及び建造物等に関する一考察  
—— 他地域の東照宮との比較を含めて —— …… 内 池 英 樹 ……35

令和8年3月

岡山県立博物館



写真1 備前焼（彩色備前） 三十六歌仙置物



写真2 備前焼（彩色備前） 三十六歌仙置物の箱（いずれも高19.0×幅46.3×奥行68.2cm）



- |             |              |
|-------------|--------------|
| ② 紀貫之（右一）   | ① 柿本人麿（左一）   |
| ④ 伊勢（右二）    | ③ 凡河内躬恒（左二）  |
| ⑥ 山辺赤人（右三）  | ⑤ 大伴家持（左三）   |
| ⑧ 僧正遍昭（右四）  | ⑦ 在原業平（左四）   |
| ⑩ 紀友則（右五）   | ⑨ 素性法師（左五）   |
|             | 所在不明         |
| ⑫ 小野小町（右六）  | ⑪ 猿丸大夫（左六）   |
| ⑭ 藤原朝忠（右七）  | ⑬ 藤原兼輔（左七）   |
| ⑯ 藤原高光（右八）  | ⑮ 藤原敦忠（左八）   |
| ⑰ 壬生忠岑（右九）  | ⑰ 源公忠（左九）    |
| ⑳ 大中臣頼基（右十） | ⑱ 斎宮女御（左十）   |
| ㉒ 源重之（右十一）  | ㉑ 藤原敏行（左十一）  |
| ㉔ 源信明（右十二）  | ㉓ 源宗干朝臣（左十二） |
| ㉖ 源順（右十三）   | ㉕ 藤原清正（左十三）  |
| ㉘ 清原元輔（右十四） | ㉗ 藤原興風（左十四）  |
|             | 所在不明         |
| ㉓ 藤原元真（右十五） | ㉙ 坂上是則（左十五）  |
| ㉔ 藤原仲文（右十六） | ㉑ 小大君（左十六）   |
| ㉔ 壬生忠見（右十七） | ㉓ 大中臣能宣（左十七） |
| ㉖ 中務（右十八）   | ㉕ 平兼盛（左十八）   |

図1 写真1の配置



② 紀貫之 (右一)



① 柿本人麿 (左一)



④ 伊勢 (右二)



③ 凡河内躬恒 (左二)



⑥ 山辺赤人 (右三)



⑤ 大伴家持 (左三)

写真3 備前焼(彩色備前) 三十六歌仙置物①~⑥



⑧ 僧正遍昭 (右四)



⑦ 在原業平 (左四)



⑩ 紀友則 (右五)

⑨ 素性法師 (左五) 所在不明



⑫ 小野小町 (右六)



⑪ 猿丸大夫 (左六)

写真 4 備前焼 (彩色備前) 三十六歌仙置物⑦~⑫



⑭ 藤原朝忠 (右七)



⑬ 藤原兼輔 (左七)



⑯ 藤原高光 (右八)



⑮ 藤原敦忠 (左八)



⑱ 壬生忠岑 (右九)



⑰ 源公忠 (左九)

写真5 備前焼 (彩色備前) 三十六歌仙置物⑬~⑱



⑳ 大中臣頼基 (右十)



⑲ 齋宮女御 (左十)



㉒ 源重之 (右十一)



㉑ 藤原敏行 (左十一)



㉔ 源信明 (右十二)



㉓ 源宗干朝臣 (左十二)



㊸ 源順（右十三）



㊹ 藤原清正（左十三）



㊺ 清原元輔（右十四） 所在不明



㊻ 藤原興風（左十四）



㊼ 藤原元真（右十五）



㊽ 坂上是則（左十五）

写真7 備前焼（彩色備前）三十六歌仙置物㊸～㊼



⑳ 藤原仲文 (右十六)



㉑ 小大君 (左十六)



㉒ 壬生忠見 (右十七)



㉓ 大中臣能宣 (左十七)



㉔ 中務 (右十八)



㉕ 平兼盛 (左十八)

写真 8 備前焼 (彩色備前) 三十六歌仙置物㉑～㉕

# 備前焼 (彩色備前) 三十六歌仙置物

さいしきびぜん

さんじゅうろっかせんおきもの

——池田家旧蔵品の紹介——

重根 弘和

はじめに

「備前焼 (彩色備前) 三十六歌仙置物」(写真1、以下「三十六歌仙置物」)は、やきものである。四箱に分けて収められ、それぞれの箱の蓋に、「彩色伊部／三十六歌仙 四箱之内」(写真2)と書く。箱にある「伊部」とは、備前焼を作り続けてきた地域の地名である。寛永年間(一六二四～四四)の後半から、備前で作られたやきものを伊部と表記する例が増え(重根二〇二二)、近代以降、一九四〇年代までは、備前焼よりも伊部焼と呼ぶほうが一般的であった(目賀一九八三、間壁一九九〇)。現在は、備前焼の呼称が一般化しているため、本稿は備前焼の表記を使用する。

「伊部」の前には、「彩色」と記す。伊部焼や備前焼と呼ばれるやきものは、成形した土を、基本、釉薬を掛けずにおおよそ一二〇〇度前後の温度で焼成する。そのため、茶色で単色の印象が強い。しかし、「三十六歌仙置物」は、さまざまな色が着けられ、とても色鮮やかである。わざわざ彩色と記したのは、通常の伊部焼(備前焼)と区別する必要があったからだろう。

備前焼は基本的には釉薬を使わないことから、焼き締め陶器に区別される。ただし、江戸時代中頃には白色に発色する土に透明釉を掛けたもの、幕末には上絵付けをしたものを伊部において作る。

そのため、備前焼とされるやきものの中には、焼き締め陶器ではないものも含む。ちなみに、前者は白備前、もしくは閑谷焼の一種とされ、後者は絵備前と呼ばれる。

彩色備前(伊部)は、絵備前とは異なる。絵備前は一二〇〇度程度で焼成した後に色絵付けを行い、八〇〇度で再度焼いたものである(桂一九八三)。

それに対して彩色備前は、素焼(八〇〇度の焼成)した後に、胡粉(貝殻などから作った白色顔料)を塗り、その上から絵の具で色を着けている(今泉、小森一九二五)。

こうした釉薬を掛けたり、絵の具で色を着けたりしたやきものは、備前焼に含まないとする考えもあるかもしれないが、ここではひとまず、伊部およびその周辺地域でつくり続けてきたやきものを備前焼として、八〇〇年以上に及ぶ歴史の一事例と考えることにした。

パリ万博開催の翌年である一九〇一(明治三四)年、日本で初めて編纂された公式の美術史書『稿本日本帝国美術略史』が刊行される。その中の備前焼の項目を見ると、彩色備前についての記述はない。しかし、備前焼として掲載された写真三点のうち、二点が彩色備前である。このことから、彩色備前が備前焼の一事例と考えられていたことがわかる(桂一九八三)。

一 三十六歌仙とは

一九八五（昭和六〇）年に刊行された『国史大辞典』によると、「三十六歌仙」とは、すぐれた歌人三十六人の総称とある。たしかに歌人の総称でもあるが、三十六歌仙が成立した当初は、歌集の呼び名としても使われた。

三十六歌仙の母体となった『三十六人撰』は、平安時代中期最大の文化人ともいわれる藤原公任により、一〇〇九（寛弘六）年からそれほど時間が経過していない頃に編纂された（吉海二〇二一）。三十六人の歌人を左右に分けて二人一組にした歌合形式で、有力歌人六人は一人あたり十首、その他の歌人三十人は一人あたり三首、合計一五〇首の歌を収める（「新編国歌大観」編集委員会一九八七）。

『三十六人撰』に掲載された歌人三十六人の歌から、それぞれ一首を選んで収録したものが、「三十六歌仙」、あるいは「三十六人歌合」と呼ばれた。そのとき選ぶ歌は、掲載された三十六人の歌人のものであれば、必ずしも『三十六人撰』に収録された歌でなくてもよかった（吉海二〇二一）。

『三十六人撰』はもちろん、当初の「三十六歌仙」は歌のみを記したものであったが、選ばれた歌に、歌人の絵を添えた作品が登場する。その代表例として知られるのが、「佐竹本三十六歌仙絵」である。久保田藩（秋田県）佐竹家の旧蔵品であったことから佐竹本と呼ばれるが、もとは下鴨神社（京都府）の神庫に収められていた（森嶋一九六七）。

二〇一九（令和元）年、京都国立博物館において特別展「流転一〇〇年 佐竹本 三十六歌仙絵と王朝の美」が開催された。テレビ番組や雑誌などでも特集が組まれ、非常に注目された展覧会であり、改めて佐竹本を広く周知する機会となった。三十六歌仙と聞いたとき、多くの人がまず思い浮かべるのは、おそらくこの佐竹本ではないか。

佐竹本の成立は鎌倉時代、十三世紀とされる。制作から七〇〇年が経過しており、現在まで伝えられるにあたり、何度か補修が行われた痕跡がある。中でも、凡河内躬恒の全体と、紀貫之の歌仙伝部分は、料紙ごと後補で、狩野派の絵師である狩野探幽（一六〇二〜七四）が補修したとされる（井並二〇一九）。

後補が探幽の筆によるとする根拠は不詳であるが（井並二〇一九）、探幽の「新三十六歌仙画帖」を見ると、「佐竹本三十六歌仙絵」と共通する表現が認められる（加藤二〇一三）。探幽は佐竹本を見て学んだ可能性がある。徳川政権が確立する十七世紀、「古典復興」の動きがあり、「伊勢物語」「源氏物語」とあわせて、歌仙絵に対する関心も高まる。

この時期、三十六歌仙について、もう一つ大きな動きがある。扁額の奉納である。

三十六歌仙を描いた扁額の奉納は、十五〜十六世紀でも複数確認できるが、日光東照宮の拝殿に掲げられたのを契機に、各地の東照宮でも奉納された（四辻二〇一三）。東照宮への三十六歌仙扁額奉納の具体例については、本研究報告別稿で内池が紹介する。

最初の勅撰和歌集『古今和歌集』(以下、『古今集』)の仮名序冒頭部分の後半に、つぎのような記述がある。

「ちからをもいれずしてあめつちをうごかし、めに見えぬおに神をもあはれとおもはせ、をとこをむなのなかをもやはらげ、たけきものふの心をもなぐさむるはうたなり」

この記述より、当時、和歌には特別な力があると考えられていたとわかる。そのためか、平安時代には、幾度も繰り返し和歌集が編纂された。

『古今集』仮名序の終わり近くには、「延喜五年」(九〇五)の記載がある(「新編国歌大観」編集委員会一九八三)。「三十六人撰」の成立は、その約一〇〇年後である。

『三十六人撰』を基にした「三十六歌仙」は、特別な力を持つ歌を文字で記し、歌合形式で紹介する作品であった。鎌倉時代になると、選んだ歌に加え、その歌を詠んだ歌仙の官位や来歴を記し、さらにはその姿を描いた絵を添えた歌仙絵が作られる。歌を詠んだ人物への関心が高まっていた様子がかがえる。

それからしばらくして江戸時代をむかえると、歌仙の姿を大きく描いた扁額を、神社などに奉納する例が増える。歌仙が神格化されている。

こうした変遷をみたとき、時代が新しくなるにともない、「三十六歌仙」における絵の重要度が増している印象を受ける。「佐竹本三十六歌仙絵」が、「歌仙絵」と表記されるのも、その表れといえるのではないか。

## 二 作品の伝来と公開記録

「三十六歌仙置物」は、本来三十六点のはずだが、確認できたのは三十四点である。すべての作品の内側に貼り紙があり、それぞれ左右の位置と番号とともに、歌人の名前が墨で書かれていた(写真13(46))。その墨書に基づき三十六歌仙の照合を行ったところ、素性法師と清原元輔が失われているとわかった。

ちなみに、岡山藩池田家初代の光政は、元輔の「契りきな」の歌を記した書を残しており(岡山大学附属図書館、林原美術館二〇一三)、光政は元輔に特別な思い入れがあった可能性があるとして、浅利尚民氏(就実大学教授)から教示を得た。

岡山藩池田家の所蔵品と売立記録について研究を続ける浅利氏によると、箱の蓋や側面に貼られた紙(写真2)は、明治時代末から大正時代に池田家の蔵で使用したものと一致し、池田家の蔵品目録を見ると、本作と思われる記録が、一九一八(大正七)年には確認できるとのことであった。

池田家「秘蔵」の「三十六歌仙置物」は、彩色備前の「代表作」とされてきたが(今泉、小森一九二五)、全容が紹介されたことはなかった。これまでの公開記録は、つぎのとおりである。

一九二五(大正十四)年刊行の『備前窯陶誌』(岡上一九二五)で、二段に分けて六点を展示した様子が写真で紹介された。下段には、在原業平(7)、藤原興風(27)、小大君(31)、平兼盛(35)、上段には、藤原敦忠(15)とともに、僧正遍昭(8)とは異なる僧形の像がある。おそらく、失われた像の一つ、素性法師である。

翌年、東宮殿下の中国三県行啓があり、宿泊所の一つであった岡山後楽園において、岡山ゆかりの文化財が陳列された。陳列品は写真撮影され、『行啓記念遺墨遺品帖』（笹田一九二六）として記録が残る。その中には、「三十六歌仙置物」の写真もあり、山辺赤人（⑥）、藤原仲文（⑫）、源信明（⑭）、僧形像（僧正遍昭（⑧）とは異なる）、大中臣能宣（⑬）、小大君（⑰）の六点を掲載する。僧形像と小大君以外、『備前窯陶誌』とは掲載作品が異なる。

現在、先に紹介した四箱（写真2）に加えて、それよりやや小さな箱（写真9）が一つ付属する。箱の蓋には、「三十六歌仙ノ内／彩色伊部焼 六個」と記す。おそらくこの箱は、六点のみを入れて岡山後楽園へ移動するときを用意したものである。

ところで、『行啓記念遺墨遺品帖』の「本帖発刊に就て」を見ると、一九二六年の十数年前（一九一〇年の可能性が高い）、明治天皇が岡山へ行幸した際に同様の展示を行い、写真帖を作成したとある。「三十六歌仙置物」が陳列されたかは不明であるが、仮に陳列されたのであれば、『備前窯陶誌』掲載写真は、そのときに撮影された可能性がある。



写真9 備前焼（彩色備前）  
三十六歌仙置物の内、六点を  
入れるために作られた箱  
（高21.5×幅44.8×奥行43.5cm）

なお、『備前窯陶誌』『行啓記念遺墨遺品帖』いずれにおいても、「三十六歌仙置物」は、「池田候爵家」の蔵品として掲載する。

この後、「三十六歌仙置物」が公開されることはしばらくなかったが、一九八三（昭和五十八）年、備前焼研究の第一人者である桂又三郎氏が、「江戸末期から明治初年に岡山の津田骨董商に当時伊部在住の木村清近が頼まれて制作した」とされる「彩色備前三十六歌仙」を紹介するにあたり、本作について触れる（桂一九八三）。

桂は、本稿で紹介する作品を「本歌」とし、以後に制作されたものはそれに基づき作られたと考えた。そして、「本歌は池田家に保存されていたが、明治以降なくなった」とする。

先に紹介したとおり、浅利氏によると、「三十六歌仙置物」が池田家の蔵品として確認できるようになるのは、一九一八（大正七）年以降である。

池田家に伝わり、明治以降に失われたとする桂氏と、現在閲覧可能な文献記録で確認できるのは大正以降とする浅利氏。ともにかつて池田家の蔵品であったとする点は共通するが、その時期については見解が異なる。

浅利氏は、今に伝わる当時の目録など（『池田家文庫』）、複数の記録を確認しており、「三十六歌仙置物」が一九一八年に池田家にあったことは確かといえる。

しかし、桂氏も、根拠なく明治時代以前に池田家で保存していたとするわけではない。

桂氏は、池田家の「蔵帳」に、次のような記録があったと述べる。

「置物并卓之類

(出所不分明)

一置物

三十六個

伊部焼彩色焼三十六歌撰

匣櫃白木 四個

出所不分明 明治廿五年

慶政公御手許上り、同廿六年、同花畑邸ヨリ遷納ニナル少々欠損  
アレドモ慶政公御取遣ノ際、御手許ニテ御修繕有之」

「蔵帳」については、現在確認できないため、信憑性を疑う声もあるかもしれないが、桂氏は実際に池田家の蔵に出入りし、この他にも詳細な記述を紹介している。何らかの記録を見て書き写した可能性が高い。浅利氏も桂氏の記述に不自然なところはないとする。

この記録を信じるとすると、「三十六歌仙置物」は一八九二(明治二十五)年には池田家の蔵品であったことになる。ただし、「出所不分明」とされ、それ以前の所在はわからない。

なお、桂氏は、岡山市北区内山下の西丸にあった池田家の宝物蔵で、源信明(⑳)、僧形像(僧正遍昭(㉑))とは異なる)、小大君(㉒)の三点を確認したとし、写真を紹介するが、それ以外は見当たらなかったとの記述も残す。

「三十六歌仙置物」の公開記録は、以上である。これまで、最大でも六点しか公開されてこなかった中、二点が失われているとはいえず、ほぼ全体像がわかる状態で、箱まで揃ってこのたび発見された意義は大きい。

三 制作時期について

一九二五年に刊行された『日本陶瓷史』(今泉、小森一九二五)では、「岡山の池田男爵家に、秘蔵せられて居る三十六歌仙の置物」の制作時期について、つぎのように記す。

「三十六歌仙の像は、正徳五年に出来たもので、当時、岡山藩の御抱へ絵師であつた、狩野三徳と、其の子の自得とに命じて、元信の筆意に倣つて、其の図案や彩色をさせたものであると云ふ」  
記述に従うと、本作は一七一五年に作られ、狩野派の絵師により彩色されたものとなる。制作時期が特定できる彩色備前はとも希少であるため、他の彩色備前の年代を考へるとき、本作は真つ先に比較対象となる基準作といえる。

しかし、この記述の元となった記事を確認すると、そこまで断定はできない。

明記されていないが、内容から判断する限り、おそらく「先祖【並】御奉公之品書上」・「狩野伝」(『池田家文庫』岡山大学図書館蔵)という、狩野三徳の奉公書の記事を元にしてている。記事にはつぎのようにある。

「一、同年九月十九日從江戸被 仰付候御供并伊部焼」彩色物御用相勤申候」

同年は前の記事から正徳五(一七一五)年と判断でき、九月十九日に江戸より仰せ付けられた御供と、伊部焼彩色物御用を勤めたところがある。「伊部焼彩色物」とあるが、三十六歌仙であると記されていない。

このほか彩色備前の記述は、一七二〇（宝永七）年から確認できるが、一七四三（寛保三）<sup>かんぽう</sup>年を最後に見られなくなる。そのため、それより後に作られた彩色備前は、藩絵師ではなく、町絵師か陶工などが彩色したと推測されている（片山一九九三）。

彩色備前について、ある特徴に基づき制作年を推測したり、明確な基準を持って変遷を説明したりするのは難しいが、こうした文献記録を起点にその概略を述べると、つぎのとおりである。

一七一〇年に作られた「牛・鹿之作物彩色」は、当時十歳であった岡山藩池田家三代、継政の「御用」であった。それに愛着を持った継政が、藩主になった翌年の一七一五年、絵師に命じて本格的に彩色備前を作らせたのではないか（片山一九九三）。ただし、それがどのような作品であったかは不明である。

岡山の豪商である河本立軒<sup>こうもとつげん</sup>が自作した「宝珠香合」（写真10、岡山県立博物館）は、箱書から一八〇五（文化二）年に制作されたとわかる。彩色備前の記事が登場してからおよそ一〇〇年後、十九世紀初頭にはその技術が専門の技術者以外にも広がっていた。



写真10  
備前焼（彩色備前）宝珠香合  
岡山県立博物館



写真11  
備前焼（彩色備前）鶏置物  
岡山県立博物館

「鶏置物」（写真11、岡山県立博物館）は、内側に金重<sup>かねしげ</sup>煤陽<sup>ばいよう</sup>の窠<sup>かま</sup>印<sup>じりし</sup>（作者を示す記号）があり、煤陽が亡くなる一九一六（大正五）年より前に作られた作品とわかる。煤陽の子である金重陶陽<sup>かねしげらうよう</sup>、そして同時代に活躍した三村<sup>みむら</sup>陶景<sup>たうけい</sup>も彩色備前の作品を残しており、十九世紀後半から二十世紀前半に制作された作品群の特徴は把握できる。「三十六歌仙置物」は少なくとも、そうした十九世紀後半から二十世紀前半の作品とは異なる。陶陽や陶景の作品のほうが、色が濃く、はっきりとしているように感じられるものが多い。

先に紹介したとおり、江戸時代末から明治時代初頭、一八六七年頃に制作された「彩色備前三十六歌仙」を、一人ずつ丁寧に紹介した桂氏による書籍がある（桂一九八三）。そこに掲載された写真を見ると、座っている像だけではなく、立ち姿や腰を少し浮かせたように見える像も多い。また、あくまでも写真からの判断になるが、本稿で紹介する作品よりも頭部が大きく見える。



写真12  
備前焼（彩色備前） 東下り置物  
岡山県立博物館

「本歌」である池田家旧蔵品は全て座っており、基本的には大きな動きが感じられる作りになっておらず、微妙な肩の動きや首の傾きなどで表情を付ける。顔や服飾品の表現も大きく異なり、桂氏が紹介した作品は「本歌」をそのまま模倣したものではない。

一八七九〜八〇（明治十二〜三）年には、さらに模倣品が作られ、海外に輸出されていたようだが（藤谷一九一二）、それがどういったものであったかは不明である。

桂氏が紹介した作品が一八六七年頃の制作で、池田家旧蔵品である本稿掲載作が本歌といえるのであれば、その制作年は、本格的に彩色備前を作り始めた一七二五年頃から一八六七年頃に絞り込める。

ここからは感覚的な推測にはなるが、本稿紹介作は、現在に伝わる彩色備前の中では、古い傾向にあるとされてきたもの（写真12）と特徴が類似する。着物の表現などはむしろ、そうした作品よりも精緻であり、絵画での表現を正確に写そうとしている印象を受ける。藩絵師による彩色は一七一五〜四三年に限定できるとの推測が正しいとすると、その頃の制作と考えたいところであるが、藩絵師による彩色と断定できない上に、比較対象とした作品の制作年代も限定できていないことから、現状では十八世紀から十九世紀中頃の間には作られたと述べるにとどめておく。

#### 四 作品紹介と歌仙の概略

「三十六歌仙置物」の歌人を、一人ずつ順に紹介する。掲載順序と歌人の名前表記については、内面に貼られた紙の墨書に基づき、つぎの書籍に従った。

・吉海直人 『ビギナーズ・クラシックス日本の古典 三十六

歌仙』 KADOKAWA 二〇二二

生没年、人物紹介、和歌の表記も最新の成果をまとめた本書籍を参考にし、人物紹介については、適宜、つぎの書籍からも引用した。

・小泉欽司編 『朝日日本歴史人物事典』 朝日新聞社 一九九四

・京都国立博物館、日本経済新聞社編 『流転一〇〇年 佐竹本

三十六歌仙絵と王朝の美』 二〇一九

歌については、佐竹本に取り上げられたものに加え、よく知られる百人一首の歌も併記した。



左 柿本人麿 一

写真13 ① 柿本人麿 (左一)  
高さ：14.5cm 幅：16.7cm 奥行：12.7cm 重さ：460g

① 柿本人麿 かきのもとひとまろ 生没年未詳

主に持統・文武朝（六五八年～七〇七年頃）に活躍した身分の低い歌人。『古今集』仮名序で「歌の聖」と讃えられるが、ここに掲載する二首は人麿の歌ではないとされる。『万葉集』は「人麻呂」、『古今集』は「人麿」、百人一首は「人丸」と表記するのが一般的。

「佐竹本三十六歌仙絵」

ほのぼのとあかしのうらのあさぎりにしまがくれゆく舟をしぞおもふ

「百人一首」

あしびきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む



右 紀貫之 一

写真14 ② 紀貫之 (右一)  
高さ：14.8cm 幅：16.6cm 奥行：12.6cm 重さ：429g

② 紀貫之 きのつらゆき 八七二年頃～九四五年

紀望行の子で、紀友則(⑩)の従兄弟にあたる。『古今集』撰者の一人で、仮名序を書く。平安時代最大の歌人ともいわれる。仮名で記した『土佐日記』の作者である。藤原公任の『三十六人撰』により、人麿(①)と並ぶ大歌人と評価された。

「佐竹本三十六歌仙絵」

さくらちる木の下風はさむからでそらにしられぬ雪ぞふりける

「百人一首」

人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香に匂ひける



左 凡河内躬恒 二

写真15 ③ 凡河内躬恒（左二）  
高さ：15.3cm 幅：15.7cm 奥行：12.1cm 重さ：453g

③ 凡河内躬恒 生没年未詳

九世紀後半に活躍。八六〇年から八七九年まで卑官を歴任している。「佐竹本三十六歌仙絵」にある躬恒の歌仙絵と歌仙伝は、狩野探幽が復元したと伝わり、歌仙伝については別人のものが紛れ込んだ可能性がある。『古今集』撰者の一人。

「佐竹本三十六歌仙絵」

いづくとも春のひかりはわかなくにまだみよしのの山は雪ふる

「百人一首」

心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花



右 伊勢 二

写真16 ④ 伊勢（右二）  
高さ：10.6cm 幅：14.8cm 奥行：12.8cm 重さ：289g

④ 伊勢 八七二年頃〜九三八年頃

藤原継陰の娘。父である継陰が伊勢守だったことから伊勢と呼ばれた。宇多天皇の中宮温子（藤原基経の娘）に仕えた女房。その間、藤原仲平、時平、宇多天皇、敦慶親王など複数の男性に愛され、親王との間には中務(36)が誕生。

「佐竹本三十六歌仙絵」

みはのやまいかにまち見むとしふともたづぬる人もあらじとおもへば

「百人一首」

難波瀉短き葦の節の間もあはでこの世をすぐしてよとや



左 中納言家持 三

写真17 ⑤ 大伴家持 (左三)

高さ：16.4cm 幅：18.7cm 奥行：14.0cm 重さ：485g

⑤ 大伴家持 七一年頃〜七八五年

おおとものやかもち  
おおとものたびと  
大伴旅人の子。『万葉集』に四八〇首の歌（全体の一割強）があることから、撰者と目される。官位は従三位中納言まで昇るが、藤原氏の他氏排斥によって受領（実際に任国におもむく、諸国の長官）を歴任。没後、藤原種継暗殺への関与が疑われ官位を剥奪。

「佐竹本三十六歌仙絵」

さほしかのあさたつをののあきはぎにたまと見るまでをけるしらつゆ

「百人一首」

かささぎの渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞ更けにける



右 山辺赤人 三

写真18 ⑥ 山辺赤人 (右三)

高さ：15.2cm 幅：17.0cm 奥行：12.5cm 重さ：447g

⑥ 山辺赤人 生没年未詳

やまべのあかひと  
七〇一年頃〜七五〇年頃、特に聖武天皇期（在位七二四年〜七四九年）に活躍。『古今集』仮名序で柿本人麿（①）とともに「歌の聖」と称される。中世には人麿と同一人物説もあった。『万葉集』では「山部」だが、平安時代は「山辺」表記が一般的。

「佐竹本三十六歌仙絵」

わかのうらにしほみちくればかたを波あしべをさしてたづなきわたる

「百人一首」

田子の浦に打ち出でてみれば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ



左 在原業平朝臣 四

写真19 ⑦ 在原業平（左四）  
高さ：15.8cm 幅：18.0cm 奥行：13.0cm 重さ：489g

⑦ 在原業平 八二五年～八八〇年  
ありわらのなりひら  
 阿保親王の子で、母は桓武天皇の皇女、伊都内親王。在原行平いぼていの異母弟。『古今集』に収録された業平の歌が『伊勢物語』主人公の歌となっており、業平はその主人公のモデルとされる。美男子として知られ、清和天皇の女御、高子（二条后）との恋が有名。  
 「佐竹本三十六歌仙絵」  
 代の中にたえてさくらのなかりせばはるのこころはのどけからまし  
 「百人一首」  
 ちはやふる神代も聞かず龍田川からくれなゐに水くぐるとは



右 僧正遍昭 四

写真20 ⑧ 僧正遍昭（右四）  
高さ：12.4cm 幅：16.3cm 奥行：9.4cm 重さ：423g

⑧ 僧正遍昭 八一六年～八九〇年  
そうじょうへんじょう  
 俗名は良岑宗貞。桓武天皇の孫。素性法師（⑨）の父。仁明天皇崩御後、三十五歳の若さで出家。後に僧正の位に就いて「花山僧正」と称される。佐竹本に「遍照」とあるが、「偏照」と書くのは六条家、「遍昭」は御子左家（ともに和歌の名門家）とされる。  
 「佐竹本三十六歌仙絵」  
 すゑのつゆもとのしづくやよの中のおくれさきだつためしなるらん  
 「百人一首」  
 天津風雲の通ひ路吹きとちよ乙女の姿しばしとどめむ

⑨ 素性法師 生没年未詳

俗名は良岑玄利。僧正遍昭(⑧)の子。遍昭の出家が八五〇年であるからそれ以前に生まれ、九〇五年に屏風歌を書いていることからそれまで生存したとわかる。『大和物語』一六八段に、父から「法師の子は法師になるぞよき」といわれ出家させられたとある。

〔佐竹本三十六歌仙絵〕

いまこむといひしばかりにながつきのありあけの月をまちいでつるかな  
 〔百人一首〕

いまこむといひしばかりにながつきのありあけの月をまちいでつるかな

⑨ 素性法師（左五） 所在不明

⑩ 紀友則 生年未詳 九〇五年頃

紀有朋の子。有朋は紀貫之(②)の父である望行と兄弟であるため、友則と貫之は従兄弟同士になる。『古今集』の撰者の一人。『古今集』八三八番の詞書に「きのとものりが身まかりにける時よめる」とあり、貫之の哀傷歌が掲載されている。

〔佐竹本三十六歌仙絵〕

夕さればさほのかわらのかはざりにともまよはせる千鳥なくなり  
 〔百人一首〕

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ



右 紀友則 五

写真21 ⑩ 紀友則（右五）

高さ：14.9cm 幅：17.3cm 奥行：12.8cm 重さ：468g



左 猿丸大夫 六

写真22 ⑪ 猿丸大夫 (左六)

高さ：14.8cm 幅：17.8cm 奥行：12.5cm 重さ：450g

⑪ 猿丸大夫 さるまるだいふ 生没年未詳

伝承的な歌人で、実在した人物かどうか不明とされる。歌仙絵では、名前に基づき猿顔に近づけるためか、やや異様な風貌ふうぼうに描かれることが多いが、本作にそうした表現はなく、顔の表情は他と大きく異なるわけではない。

〔佐竹本三十六歌仙絵〕

おちこちのたづきもしらぬやま中におぼつかなくもよぶこどりかな  
〔百人一首〕

奥山に紅葉踏みわけ鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき



右 小野小町 六

写真23 ⑫ 小野小町 (右六)

高さ：10.9cm 幅：15.2cm 奥行：13.1cm 重さ：312g

⑫ 小野小町 おののこまち 八二〇年頃～八七〇年頃

仁明天皇の更衣にんみょうてんのう (女御に次ぐ後宮の女官)、小野吉子かとされる。絶世の美人また和歌の名手として有名。百人一首に「花の色は」の歌があるためか、小町の歌仙絵は衣装に桜の花を描くことが多い。本作も流水文と桜の花を描く。

〔佐竹本三十六歌仙絵〕

いろ見えでうつろふものはよの中の人このころのはなにぞありける  
〔百人一首〕

花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに



左 中納言兼輔 七

写真24 ⑬ 藤原兼輔（左七）

高さ：15.1cm 幅：18.0cm 奥行：12.4cm 重さ：473g

⑬ 藤原兼輔 八七七年～九三三年  
 紫式部の曾祖父にあたり、藤原清正（⑳）の父。鴨川堤近くに邸があったことから「堤中納言」と称された。従兄弟である藤原定方の娘を妻とし、その間に生まれた娘の桑子は醍醐天皇に入内して章明親王を産む。

「佐竹本三十六歌仙絵」

人のおやのころはやみにあらねどもこをおもふみちにまよひぬるかな

「百人一首」

みかの原わきて流るる泉川いつみきとてか恋しかるらむ



右 中納言朝忠 七

写真25 ⑭ 藤原朝忠（右七）

高さ：15.7cm 幅：17.0cm 奥行：12.7cm 重さ：467g

⑭ 藤原朝忠 九一〇年～九六六年  
 藤原定方の五男。土御門中納言と号した。笙（雅楽で使用する管楽器のひとつ）の名手として知られる。天徳内裏歌合では、ここに掲載した歌で、藤原元真（㉑）に勝利を収める。百人一首に登場する右近と恋愛関係にあった。

「佐竹本三十六歌仙絵」

あふことのたえてしなくはなかなか人に身をもうらみざらまし

「百人一首」

あふことのたえてしなくはなかなか人に身をもうらみざらまし



写真26 ⑮ 藤原敦忠（左八）  
高さ：15.6cm 幅：17.9cm 奥行：13.0cm 重さ：462g

⑮ 藤原敦忠 九〇六年〜九四三年

左大臣藤原時平の三男で、母は在原業平（⑦）の孫。琵琶の名手として知られ、枇杷中納言とも称された。恋多き貴公子で、『大鏡』には「世にめでたき和歌の上手」とある。父とともに菅原道真の怨霊に崇られ、三十八歳で亡くなる。

「佐竹本三十六歌仙絵」

あひ見てののちのころにくらぶればむかしはものをおもはざりけり  
「百人一首」

あひ見てののちのころにくらぶればむかしはものをおもはざりけり



写真27 ⑯ 藤原高光（右八）  
高さ：15.6cm 幅：17.5cm 奥行：13.1cm 重さ：457g

⑯ 藤原高光 九三九年頃〜九九四年

右大臣藤原師輔と醍醐天皇皇女雅子の子。姉は村上天皇中宮の安子。右近衛少将などに任じられるが、二十三歳で出家して多武峰（奈良県桜井市）に隠棲したので、多武峰少将と称される。法名は如覚、道号は寂真。

「佐竹本三十六歌仙絵」

かくばかりへがたく見ゆるよの中にうらやましくもすめる月かな



左 源公忠朝臣 九

写真28 ⑰ 源公忠（左九）  
高さ：15.6cm 幅：12.2cm 奥行：12.7cm 重さ：457g

⑰ 源公忠 みなものきんただ 八八九年～九四八年

光孝天皇の孫で、源国紀の子。源信明（⑳）の父でもある。従兄弟にあたる醍醐天皇から強く信頼される。薰物（練香）の調合の名手であり、『源氏物語』梅枝巻には「公忠の百歩香」が登場する。放鷹の名手としても知られる。

「佐竹本三十六歌仙絵」

行きやらでやまちくらしつほととぎすいま一こゑのきかまほしさに

⑱ 壬生忠岑 みぶのただみね 生没年未詳

九〇〇年前後に活躍。壬生忠見（㉔）の父。官位には生涯恵まれなかったが、歌人としては早くから名を成し、『古今集』の撰者の一人となる。佐竹本の「はるたつと」の歌は、藤原公任著の『和歌九品』では最高位の上品上の歌とされる。

「佐竹本三十六歌仙絵」

はるたつといふばかりにやみよしののやまもかすみてけさは見ゆらん  
「百人一首」

有明のつれなくみえし別よりあかつきばかりうき物はなし



右 壬生忠岑 九

写真29 ⑱ 壬生忠岑（右九）  
高さ：15.6cm 幅：16.9cm 奥行：13.0cm 重さ：479g



左 齋宮女御 十

写真30 ⑱ 齋宮女御（左十）

高さ：10.7cm 幅：15.5cm 奥行：12.0cm 重さ：304g

⑱ 齋宮女御 九二九年～九八五年  
醍醐天皇皇子重明親王の娘、徽子女王。八歳で齋宮となる。退下（京都に戻る）した後に村上天皇の女御となったことから、齋宮女御と称される。三十六歌仙の中では最も身分が高く、佐竹本では最も豪華に描かれる。

「佐竹本三十六歌仙絵」

ことのねにみねの松風かよふらしいづれのおよりしらべそめけむ



右 大中臣頼基朝臣 十

写真31 ⑳ 大中臣頼基（右十）

高さ：14.7cm 幅：15.6cm 奥行：12.4cm 重さ：455g

⑳ 大中臣頼基 八八六年頃～九五八年頃  
伊勢神宮の祭主・神祇伯を歴任。優れた歌人が六代続いた大中臣家歌人の祖。大中臣能宣（㉓）の父。佐竹本にある歌の筑波山は富士山と並び称される東国の名山で、『万葉集』の頃から歌枕としても知られた。

「佐竹本三十六歌仙絵」

つくばやまいとどしげきに紅葉してみち見えぬまでおちやしぬらん



左 藤原敏行朝臣 十一

写真32 ②① 藤原敏行 (左十一)

高さ：16.9cm 幅：18.1cm 奥行：13.5cm 重さ：451g

②① 藤原敏行 ふじわらのとしゆき 八五〇年頃〜九〇一年あるいは九〇七年  
 父は藤原富士鷹、母は紀名虎の娘。能書家としても知られる。  
 在原業平 (⑦) は妻同士の姉妹で、親交があり、業平を模範とする  
 面があったのではないかともいわれる。業平が主人公とされる『伊勢物語』の一〇七段に登場する。

「佐竹本三十六歌仙絵」

あききぬとめにはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる

「百人一首」

住の江の岸に寄る浪夜さへや夢の通ひ路人目よくらむ



右 源重之 十一

写真33 ②② 源重之 (右十一)

高さ：15.0cm 幅：18.0cm 奥行：13.2cm 重さ：495g

②② 源重之 みなもとのしげゆき 九四〇年頃〜一〇〇〇年頃  
 貞元親王の孫で、源兼信の子。清和天皇の曾孫にあたる。冷泉  
 天皇の東宮 (皇太子) 時代に帯刀長となる。地方官を歴任した後、  
 陸奥守となった藤原実方に随行し、その地において六十歳前後で  
 亡くなったとされる。

「佐竹本三十六歌仙絵」

よしのやまみねのしら雪いつきえてけさはかすみのたちかはるらん

「百人一首」

風をいたみ岩うつなみのおのれのみくだけで物をおもふころかな



左 源宗干朝臣 十二

写真34 ㉓ 源宗干朝臣（左十二）  
高さ：15.5cm 幅：17.6cm 奥行：13.0cm 重さ：483g

㉓ 源宗干朝臣 みなもとのむねゆきあそん 生年未詳〜九三九年  
こうこうてんのう 光孝天皇の孫で、これたしのう 是忠親王の子。八九四年に従四位下となり、源  
たまわ 姓を賜り臣籍に下る。諸国の守などを歴任し、しょうし 正四位下うきようだい 右京大夫  
やまとものがたり 『大和物語』にはその不遇を嘆く話な  
 どがみられる。

「佐竹本三十六歌仙絵」

ときはなる松のみどりも春くればいまひとしほの色まさりけり

「百人一首」

山里は冬ぞ寂しさまさりけり一目も草もかれぬと思へば



右 源信明朝臣 十二

写真35 ㉔ 源信明（右十二）  
高さ：14.1cm 幅：18.2cm 奥行：13.2cm 重さ：476g

㉔ 源信明 みなもとのさねあきら 九一〇年〜九七〇年  
 源公忠(17)の子。地方官を歴任。中務(30)と親密な関係にあつ  
 たことが知られる。佐竹本にある「こひしさは」の歌は中務に贈つ  
 たもので、これに対する中務の返歌もある。中務は、摂政・関白と  
 なった藤原実頼の愛人でもあった。

「佐竹本三十六歌仙絵」

こひしさはおなじこころにあらずともこよひの月をきみみざらめや



左 藤原清正 十三

②⑤ 藤原清正 生年未詳〜九五八年

中納言藤原兼輔(⑬)の子であるが、官位の昇進は遅かった。九三〇年に従五位下に叙爵(律令制で五位に叙されること。律令官制では五位と六位の差は大きく、下級官人を脱する意味があった。)後、地方官を歴任。村上・朱雀両天皇期に専門歌人として活躍した。

〔佐竹本三十六歌仙絵〕

ねのひしにしめつる野辺のひめこ松ひかでやちよのかげをまたまし

写真36 ②⑤ 藤原清正 (左十三)  
高さ：14.8cm 幅：17.5cm 奥行：12.3cm 重さ：455g



右 源順 十口

②⑥ 源順 九一一年〜九八三年

嵯峨源氏。九三四〜五年頃、百科事典として日本の辞書史上画期的な『和名類聚抄』を編述した。九五一年、内裏の昭陽舎(後宮五舎の一つ、梨壺)に初めて置かれた撰和歌所に召され、『万葉集』の訓読と『後撰集』の編集を中心となって進めた。

〔佐竹本三十六歌仙絵〕

水のおもにてる月なみをかぞふればこよひぞ秋のもなかなりける

写真37 ②⑥ 源順 (右十三)  
高さ：13.3cm 幅：17.0cm 奥行：13.4cm 重さ：481g



左 藤原興風 十四

写真38 ②⑦ 藤原興風（左十四）

高さ：14.3cm 幅：16.7cm 奥行：12.8cm 重さ：465g

②⑦ 藤原興風 生没年未詳

最初の歌学書『歌経標式』を著した藤原浜成の曾孫。宇多天皇の時期（在位八八七年～八九七年）に活躍した。管弦に秀でたという。掲載した歌にある高砂の松は、長寿を象徴する。親しい人が亡くなり、取り残されたことを嘆いて詠んだ歌とされる。

「佐竹本三十六歌仙絵」

たれをかもしる人にせむたかさこの松もむかしのともならなくに  
「百人一首」

たれをかもしる人にせむたかさこの松もむかしのともならなくに

②⑧ 清原元輔 九〇八年～九九〇年

清原深養父の孫。清少納言の父。九八六年、七十九歳で肥後守として赴任し、現地で亡くなる。低い身分であったが、『梨壺の五人』として『後撰集』を撰し、『万葉集』などの読解を行う。『今昔物語』に「物可笑しく云て人笑はするを役とする翁」とある。

「佐竹本三十六歌仙絵」

秋ののはぎのにしきをふるさとにしかのねながらうつしてし哉  
「百人一首」

契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山浪こさじとは

②⑧ 清原元輔（右十四） 所在不明



左 坂上是則 十五

写真39 ②⑨ 坂上是則 (左十五)

高さ：15.6cm 幅：16.9cm 奥行：13.0cm 重さ：479g

②⑨ 坂上是則 生没年未詳

十世紀前半に活躍。坂上田村麻呂の末裔。『後撰集』撰者で「梨壺の五人」のひとりとなった坂上望城の父。九〇八年から九二四年までの任官記録がある。宇多朝末期から醍醐朝の歌壇で活躍した。蹴鞠の名手としても知られる。

〔佐竹本三十六歌仙絵〕

みよしののやまのしら雪つもるらしふるさとさむくなりまさり行く  
〔百人一首〕

朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪



右 藤原元真 十五

写真40 ③⑩ 藤原元真 (右十五)

高さ：14.9cm 幅：17.5cm 奥行：13.0cm 重さ：436g

③⑩ 藤原元真 生没年未詳

母は紀名虎の娘かともいわれる。九三五年から九六六年までの任官記録がある。天徳内裏歌合(『後撰集』)の編纂を進めた村上天皇により行われた)の歌人にも撰ばれた。歌にある春の別れとは、地方官に任命されて下向する人との別れ。

〔佐竹本三十六歌仙絵〕

としごこのはるのわかれをあはれとも人におくるる人ぞしるらん



写真41 ③ 小大君 (左十六)  
高さ：10.9cm 幅：14.5cm 奥行：11.7cm 重さ：281g

③ 小大君 こおおきみ 九四〇年頃～一〇一一年頃  
三條天皇の東宮時代に女蔵人にょくらうど（宮中に仕える下級の女房）として仕えたので、「三條院女蔵人左近」と称された。藤原朝光ふじわらのあさてる、藤原実方ふじわらのさねかた、平兼盛ひらのかねもり（③⑤）、源頼光みなもとのよりみつと交渉があり、藤原朝光とは長らく恋愛関係にあった。

「佐竹本三十六歌仙絵」  
いはばしのよるのちぎりも絶ぬべしあくるわびしきかつらぎの神



写真42 ③ 藤原仲文 (右十六)  
高さ：14.5cm 幅：15.3cm 奥行：13.1cm 重さ：437g

③ 藤原仲文 ふじわらのなかふみ 九二三年～九九二年  
冷泉天皇れいぜいてんのうの東宮時代の蔵人くらうどなどを経て、地方官を歴任。『三十六人撰』を編纂した藤原公任ふじわらのきんとうと交流。掲載した歌は、有明の月を待つうちに夜もすつかり更けてしまったという情景に、自らの境遇を重ねたといわれる。冷泉天皇の東宮時代は十七年にも及ぶ。

「佐竹本三十六歌仙絵」  
ありあけの月のひかりをまつほどにわがよのいたくふけにけるかな



左 大中臣能宣朝臣 十七

写真43 ㉓ 大中臣能宣 (左十七)  
高さ：15.9cm 幅：17.5cm 奥行：12.8cm 重さ：496g

㉓ おおなかとみのよしのぶ  
大中臣能宣 九二二年〜九九一年

大中臣頼基(㉒)の子。代々伊勢神宮の祭主を務める。源順(㉑)、清原元輔(㉔)、紀時文、坂上望城とともに「梨壺の五人」に数えられ、宮中梨壺の和歌所で、『万葉集』の訓読と『後撰集』の編集にあたった。紫式部や和泉式部などと交流のあった伊勢大輔の祖父。  
〔佐竹本三十六歌仙絵〕

千とせまでかぎれる松もけふよりはきみにひかれてよろづよやへん  
〔百人一首〕

御垣守衛士のたく火の夜は燃え昼は消えつつ物をこそ思へ



右 壬生忠見 十七

写真44 ㉔ 壬生忠見 (右十七)  
高さ：14.6cm 幅：17.3cm 奥行：12.2cm 重さ：437g

㉔ みぶのただみ  
壬生忠見 生没年未詳

壬生忠岑(㉒)の子。九五三年以降の歌合で活躍。九六〇年に開催された天徳内裏歌合において、「恋すてふ」の歌で、平兼盛(㉓)の「忍ぶれど」の歌と競い敗れた。その後食欲不振に陥り亡くなったとの話もあるが、実際は亡くなっておらず脚色とされる。  
〔佐竹本三十六歌仙絵〕

やかずともくさはもえなむかすが野をただはるの日にまかせたらなむ  
〔百人一首〕

恋すてふ我名はまだき立にけり人しれずこそおもひ初しか



左 兼盛 十八

写真45 ㊸ 平兼盛 (左十八)

高さ：15.1cm 幅：15.3cm 奥行：13.5cm 重さ：489g

㊸ 平兼盛 生年未詳〜九九〇年  
たいらのかねもり  
 光孝天皇の玄孫で、篤之王の子。兼盛王であったが、九五〇年に臣籍に下り、平姓を賜る。天徳内裏歌合において、壬生忠見(㊸)との勝負で優劣が決まらずにいたとき、村上天皇が「忍れど」の歌を口にしたことで勝利を収めたとされる。

「佐竹本三十六歌仙絵」

かぞふればわが身につもるとしつきをおくりむかふとなにいそぐらん

「百人一首」

忍ぶれど色に出でにけり我が恋は物や思ふと人の問ふまで



右 中務 十八

写真46 ㊸ 中務 (右十八)

高さ：11.9cm 幅：11.9cm 奥行：15.5cm 重さ：318g

㊸ 中務 九一二年〜九九一年  
なかつかさ  
 父は宇多天皇の皇子敦慶親王、母は伊勢(㊸)。敦慶親王が中務卿だったことから、中務と称される。実名は不詳。源信明(㊸)をはじめ、藤原実頼、藤原師氏、元良親王、常明親王などと恋愛関係があった。

「佐竹本三十六歌仙絵」

うぐひすのこゑなかりせば雪きえぬやまざといかではるをしらまし

おわりに

作品を観察して、気づいたことを最後に記しておく。

・弓二張と刀三振（写真47）が付属するが、誰にともなうか不明。

・弓、矢、刀などは木と紙で作る。

・着物部分を着色した後、底と内面に茶色を塗る。

・着物に使用する青色と緑色の絵の具は粒状感があり、ざらついた質感。青色はラメ状に光る。

・素焼後、素地の段階でそれぞれ左右と番号を書く（写真48）。

本作の大きな特色は彩色にある。おそらくそれは陶工ではなく、絵師によるものである。江戸時代には三十六歌仙の面帖がじょうや扁額へんがくが絵師により制作されており、それらを手本にした可能性が高い。意匠や絵の具が共通する絵画作品が見つかれば、作者や制作時期について、より具体的に検証できる。今後の課題である。

三十六歌仙が成立した当初、その関心は歌にあった。そこに人物の絵が添えられるようになり、いつしか人物のほうへの関心が高まり、歌仙は神格化されていった。

ここで紹介した「三十六歌仙置物」は左右に分けられ、歌合の体裁を保っているとはいえ、歌は無く、備前焼で作られた人物のみとなっている。歌を書いた色紙が添えられていた可能性もあるが、少なくとも現状では確認できない。



写真48 ⑤  
大伴家持底面



写真47  
付属品 弓と刀

本作は、彩色備前の制作年代を考えると、基準となりうる最重要件であると同時に、歌と文字から始まり、絵画、そして置物と、時代が新しくなるにともない、より具象的な表現を取り入れていく三十六歌仙において、その変遷を知る一事例にも位置付けられる。

#### 《参考文献》

- ・井並林太郎 「総論佐竹本三十六歌仙絵」『流転一〇〇年 佐竹本 三十六歌仙絵と王朝の美』京都国立博物館、日本経済新聞社編 日本経済新聞社、NHK京都放送局、NHKプラネット近畿、京都新聞 二〇一九
- ・今泉雄作、小森彦次 『日本陶史』雄山閣 一九二五
- ・岡上爲右衛門 『備前窯陶誌』大塚巧藝者出版部 一九二五
- ・岡山大学附属図書館、林原美術館編 『天下人の書状をよむ 池田家文書』吉川弘文館 二〇一三
- ・片山新助 『岡山藩の絵師と職人』山陽新聞社 一九九三
- ・桂又三郎 『彩色備前三十六歌仙』古備前研究所 一九八三
- ・加藤祥平 『十七世紀 歌仙絵の諸相』『歌仙—王朝歌人への憧れ—』徳川美術館 二〇一三
- ・笹田保編 『行啓記念遺墨遺品帖』温古会 一九二六
- ・重根弘和 『備前焼茶道具の記録—一七世紀代の茶会記を中心に—』『岡山県立博物館研究報告』四一 岡山県立博物館 二〇二一
- ・「新編国歌大観」編集委員会 『新編国歌大観』一 角川書店 一九八三
- ・「新編国歌大観」編集委員会 『新編国歌大観』五 角川書店 一九八七
- ・藤谷榮尾 『備前焼』『建築工藝叢誌』五 建築工藝協會 一九二二
- ・間壁忠彦 『備前焼』『考古学ライブラリー』六〇 ニュー・サイエンス社 一九九〇
- ・目賀道明 『備前焼の歴史』『和気郡史』資料編 下巻 和気郡史刊行会 一九八三
- ・森嶋 「三十六歌仙絵」『三十六歌仙絵』日本絵巻物全集十九 角川書店 一九六七
- ・四辻秀紀 「絵画化された歌人たち」『歌仙—王朝歌人への憧れ—』徳川美術館 二〇一三

# 備前東照宮の奉納品及び建造物等に関する一考察

## ——他地域の東照宮との比較を含めて——

内池 英樹

はじめに

寛永二一（正保元・一六四四）年に岡山藩主池田光政によって、備前東照宮が造られ、江戸時代を通して、岡山藩内からの尊崇を受けた。その後、明治一四（一八八一）年に玉井宮と合祀され、現在は玉井宮東照宮となっている。本殿と隨身門が創建当初のまま残されており、江戸時代初頭の建造物として貴重である。本殿は平成一二（二〇〇〇）年度に岡山県指定重要文化財に、隨身門は令和四（二〇二二）年度に岡山市指定重要文化財となった。なお、平成元年に火災で焼失した拝殿及び幣殿は、明治一四年に造られており、江戸時代の建造物ではない。

備前東照宮の勧請の流れは、【表1】の通りである。『池田光政公伝』によると、寛永二〇年にすでに光政から徳川家光に対して内々に尋ねており、その結果、寛永二一年六月一日に天海僧正より内諾を受けた<sup>(1)</sup>。また、翌二日に酒井忠勝から光政に対して、造営にあたって次のように申し渡されている<sup>(2)</sup>。

貴殿の志は尤なれとも、以後国々残なく願はれ、心にもあらぬ事に成行候はんは如何也、されはいかに軽く御造営然るへし。

備前に続いて勧請をする国のこともあり、「軽く御造営」をするようにと言い渡されたのである。

具体的に造営がはじまるのは、同年七月九日である。造営から完成までが三ヶ月と短いことから、基本的な建造物の材料等についても、寛永二〇年に家光に尋ねた時点で用意を始めていたのだろう。造営にあわせて、池田光政から数々の品が奉納された。そして、城下町では祭礼が行われるようになり、備前東照宮は、江戸時代を通して岡山城下の人々とともにあったのである。

これまでに、備前東照宮については、その歴史を振り返った『玉井宮東照宮誌』が編纂された。ここでは造営の流れや建造物、奉納された品々等についてまとめられている。また、倉地克直氏や神原邦男氏らによる東照宮祭礼に関する調査研究が行われ、池田光政以降の岡山藩において備前東照宮は重要な役割を果たしていたことが明らかにされてきた<sup>(3)</sup>。しかし、他地域の東照宮に奉納された文化財や建造物と合わせた検討は十分に行われてきたとは言えないだろう<sup>(4)</sup>。

そこで、小稿では、備前東照宮に池田光政が奉納した品や建造物

について、鳥取や他地域の東照宮との比較を通して、改めてその設立の意味について検討を加えていきたい。

#### 一 備前東照宮へ奉納された品と建造物

現在、玉井宮東照宮が所蔵している文化財の内、二振の太刀と甲冑が、池田光政の奉納した品と伝わっている。

太刀は、いずれも刃長が八〇cmを超えており、伊勢神宮にある奉納太刀と似た形状である<sup>(5)</sup>。一振は柄の部分の飾りが楕円(太刀一・写真1)、もう一振は柄の部分の飾りが半円になっている(太刀二・写真2)。この二振の太刀の銘文は、表裏ともに同じである。

表銘・大法師法橋来金道(写真3)

裏銘・寛永二十一年八月吉日 藤原国守造(写真4)

寛永二一(一六四四)年は、一月一六日で改元されていることから、東照宮の勧請が認められたときの年月で銘文が切られている。表銘の「大法師法橋来金道」は、山城国の刀工で「三品派」の一人にあたる。裏銘の「藤原国守」は、現時点では不明である。二名の刀工の名前が表裏にあることから、同時に打ったかどうかは分からないが、両名が制作に携わったのは間違いないだろう。初代伊賀金道は徳川家康へ刀を納めたとされており、これを受けて光政が作刀を依頼した可能性を指摘しておく。

刃文については、太刀一は直刃調、太刀二は丁子や具の目さらには大小乱れも見える。太刀一の鞘は、布で全体が覆われている上に、交互に重なるように緑や青、白等のビーズが施されている(写真5)。

また、吊り下げのために二つの金具が設けられ、そこには葵紋が彫られている(写真6)。太刀二の鞘は、黒漆が施され、麒麟が描かれている(写真7)。また、吊り下げのための金具が二個設けられ、そこには葵の紋が施されている(写真8)。いずれも葵紋が付された袋に入っていた(写真9)。

一方、奉納された甲冑の制作者は、不明である(写真10)。この甲冑は、水戸東照宮に徳川頼房によって奉納された徳川家康所用と伝わる甲冑(総毛引紅糸威胴丸具足(茨城県指定文化財))と形状等が似ている<sup>(6)</sup>。そのことを踏まえて改めて備前東照宮へ奉納された甲冑を見ると、明らかに徳川家を意識した造りとなっている。前立(写真11)はもちろん、胴の首元や大袖の上部等各所に、徳川家の家紋があらわれている(写真12～14)。

このほかには、「絵書」も奉納されている<sup>(7)</sup>。具体的な奉納品は不明だが、後述する通り、各地の東照宮には、甲冑、太刀、そして三十六歌仙扁額が奉納されている事例が多いことから、備前東照宮にも三十六歌仙扁額があった可能性はあるだろう。

備前東照宮本殿及び隨身門の平面図は、図1、2の通りである。本殿は、桁行三間梁間二間の入り母屋造りである。備前東照宮本殿を横から見た様子が、写真15である。また、写真16は隨身門を正面から見た様子になる。現在の本殿の屋根は銅板葺である。しかし、寛保二(一七四二)年の屋根修理の際に、檜皮葺にしくても良いかと江戸留守居から「植野(寛永寺)」に尋ねていた<sup>(8)</sup>。その結果、「檜皮二而無之而ハ難成趣ニ付、此度茂其俣檜皮葺ニ被 仰付候也

（檜皮葺でなければいけない）」となった。このことから、少なくとも建立当初から一八世紀半ばまでは、檜皮葺であった可能性が高いことも指摘しておきたい。

## 二 他地域の東照宮との比較

ここでは、金沢城研究調査室（現、金沢城調査研究所）による先行研究をもとにしながら、備前東照宮と各地の東照宮について比較を試みたい【表2】<sup>(9)</sup>。

比較する項目として、建造物の構造、奉納物等を挙げてみた。本殿や拝殿の他にも、多くの建造物が東照宮にはあるが、権現造とそうではない場合の本殿と拝殿・幣殿との関係性を検討する必要がある。権現造の場合は、本殿と幣殿・拝殿が一体化しており、備前東照宮や因幡東照宮のように本殿、拝殿、幣殿が分割されていない。水戸徳川家のような御三家や、江戸等で先行して建立された東照宮は、そのほとんどが権現造になっており、内部には廟も設けられた<sup>(10)</sup>。

ここで大老の酒井から池田光政が言われた一言（軽く御造営然るべし）に改めて注目したい。岡山藩をはじめとした外様大名らが建造した東照宮は、その多くが権現造ではなく、「軽く御造営」と言われた構成となっている<sup>(11)</sup>。金沢東照宮（現尾崎神社）以降、各地で造られた東照宮は、「軽く御造営」され、酒井の言葉が守られていったのである。

建造物以外のものに目を向けてみると、太刀と甲冑、そして

三十六歌仙扁額が多く、東照宮に奉納されていた。

甲冑は、紀州東照宮や水戸東照宮など江戸時代初期に造られた東照宮には、家康所用と伝わるものが奉納されているケースが多い。徳川家康の子や徳川家ゆかりの場所に東照宮が造られた場合が対象となっており、家康を祀るため家康所用のものが求められたのだろう。水戸や紀州の東照宮では、太刀も家康所用とされている。

なお、先行して和歌山に造られた紀州東照宮に奉納された太刀と比べてみると、家康から徳川頼宣に分けられた遺品と考えられる二振の太刀は、いずれもが鎌倉時代に備前で作刀されたものであり、拵えも糸巻太刀拵で備前東照宮のものとは異なる<sup>(12)</sup>。

御三家などの場合は、自分の家に家康所用の武器・武具があったのだろうが、外様大名となるとそこは難しかったのだろう。備前東照宮では、先に紹介したような水戸東照宮の甲冑に似せて、さらに各所に葵紋を付したものが用意された。これらの武器・武具については、今後、それぞれの造りや制作者等について比較検討をしていく必要があるだろう。

一方、三十六歌仙扁額については、日光東照宮に徳川秀忠が後水尾天皇に依頼して三十六歌仙和歌を奉納しており<sup>(13)</sup>、それにならって東照宮には三十六歌仙に関する品が奉納されていたようである<sup>(14)</sup>。しかし、備前東照宮には現存していない。そのことについては、後述したい。

### 三 因幡東照宮と備前東照宮

ここでは、備前東照宮の理解を深めていくために、池田光政と同族である鳥取藩池田家が造営した因幡東照宮（現鳥取東照宮）と比較を試みたい。因幡東照宮は、慶安三（一六五〇）年に鳥取藩主池田光仲によって造られた。本殿、及び幣殿はいずれも国指定の重要文化財となっている。

それぞれの建造物をまとめてみたものは、前掲の【表2】の通りである。改めて比較してみると、備前東照宮の建造物が因幡東照宮のものとはよく似ていることが見えてくる。参考として、本殿（写真17）、随神門（写真18）を付した。

また、備前東照宮および因幡東照宮は、幕府から派遣された大工（頭）が「木原木工允従五位藤原義久」で同じ人物である。それぞれの場所にいたわけではなく、建築の指導に当たったと考えるべきだろうが、「木原木工允従五位藤原義久」が関わった多くの東照宮が「軽く御造営」されているものである。

建造物がほぼ同じ内容であることは、前述の通りである。一方、奉納された品も、両社とも似ている【表3】。

それでは、改めて比較してみたい。因幡東照宮には四振、備前東照宮には二振の太刀がそれぞれ池田光仲、光政から奉納されたと思われる。これらの太刀の特徴としては、伊勢神宮に奉納された太刀に似せていることがある<sup>(16)</sup>。【表3】の内、1と6、2と7が形式としてはよく似ている（写真19、20）。ただし、因幡東照宮に奉納された刀剣類は、いずれも鳥取藩の刀工が作っており、備前東照宮と

は異なる。

甲冑については、それぞれについてまとめた調査や報告はまだない。しかし、緋緘で小札こざねが結ばれている点や、前立の形状、吹き返しや各所にちりばめられた葵紋等が、よく似ている（写真21、22）。

備前・因幡のいずれもの東照宮には、似たような太刀と甲冑が奉納されており、そのことは先行して造立された水戸や紀州の東照宮に準じていると考えてよいだろう。そして、三十六歌仙（扁）額の奉納についても同じことが言える。因幡東照宮と同じように水戸東照宮や紀州東照宮へは三十六歌仙が奉納されている<sup>(16)</sup>。一方、備前東照宮には、明確ではないが「絵書彩色」という形で、何らかの彩色されたものが奉納された<sup>(17)</sup>。後に、三十六歌仙の一人である柿本人麻呂を祀った「人丸神社」が境内に設置され、明治になったときに合社された<sup>(18)</sup>。

詳細は不明なことから、備前東照宮の扁額については、さらなる調査・検討が必要である<sup>(18)</sup>。これらの奉納物は、東照宮を祀ろうとして行われた一連の東照宮勧請の際に用意されたものと考えてよいのではないだろうか。

まとめにかえて

以上、備前東照宮の建造物及び奉納品について、全国にある東照宮と比較しながら検討した。池田光政が手掛けた備前東照宮は、外様大名によるものとしては加賀前田家の金沢東照宮に続き造営され、その後各地に設けられる「軽く御造営」された東照宮の先駆け

になった。奉納されたものも、他地域の東照宮と比較しても違和感はないことから、先行して造られた権現造東照宮の奉納品に倣いつつ、「軽く御造営」した本殿等に配置されていたのだろう。そういう意味でも備前東照宮は、「外様大名の中で」という言葉を補ったうえで、各地に造られていく「軽く御造営」した東照宮の先駆けになったのだろうか。

備前東照宮は、現在玉井宮東照宮となっているが、当時のままの本殿や光政奉納の太刀、甲冑が残っている。繰り返しになるのだが、それぞれ奉納品や建造物について、十分に調査がされてきたとは言いがたい。本稿は、ささやかな検討、紹介に止まっていることから、今後、より精緻な分析が行われる必要があるだろう。そして、その成果をふまえて、各地の東照宮と比較検討を行うことで、池田光政が目指した国造りの一端を見ることができないのではないかと考えている。

### 【註】

(1) 『池田光政公伝 上巻』（世界聖典刊行協会、一九八〇年、六八〇～六九〇頁）。

岡山への東照宮勧請にあたって、天海僧正をはじめ東叡山寛永寺及び塔頭の毘沙門堂や常照院等が次のような役割で登場する。

開眼 東叡山毘沙門堂公海僧正（この時東叡山座主）

守護 常照院憲海ならびに山門衆

四ヶ法要 常照院憲海、銘金山遍照院ら。

勧請に関する行事は、ほとんどが寛永寺または寛永寺塔頭が務めた。その中で、銘金山遍照院（現、金山寺）が地元から参加する形になっており、東照宮勧請に関わっていたようである。

また、後に鳥取に東照宮を勧請した際には、金山寺から使者がきて、白銀二〇枚と呉服一重が奉納されている（『東照宮展 後期』鳥取市歴史博物館、二〇〇三年、三五頁）。

(2) 『池田家履略記 上巻』（日本文教出版、一九六三年、一七七頁）。

(3) 倉地克直「東照宮祭祀について」（『近世の民衆と支配思想』柏書房、一九九六年）。

神原邦男監修『東照宮祭祀と岡山城下のひとびと』上・下（備前池田家の伝えた文化遺産を守る会、二〇一五年）。

(4) 本稿作成にあたって、主に次にあげる東照宮に関する研究成果に学んだ。

・ 杉田善雄「幕藩権力と寺院・門跡」（思文閣出版、二〇〇三年）

・ 金沢東照宮（尾崎神社）の研究」（金沢城研究調査室、二〇〇六年）

・ 中野光浩「諸国東照宮の史的研究」（名著刊行会、二〇〇八年）

・ 杉田善雄「將軍権力の確立」（吉川弘文館、二〇一一年）

・ 加藤千晶・重枝豊「一七世紀後半における権現造の受容に関する一考察」（『日本大学理工学部理工学研究所研究ジャーナル 一四二』（日本大学理工学部理工学研究所、二〇一八年）

なお、外様大名の東照宮の勧請にあたって、木原義久が指示をしていたことを指摘された高橋洋司「諸国東照宮の造営から見ると幕府作事方御大工木原義久の職分」（『日本建築学会関東支部研究報告集』、二〇〇九年）は未見である。

(5) 『神宮名品図録』（神宮徴古館農業館、二〇〇九年）に掲載されている鎌倉時代前期・室町時代前期の二振の玉纏横刀。備前及び因幡東照宮の柄の部分は、玉纏横刀の柄に似せている可能性がある。

(6) 『徳川頼房―初代水戸藩主の奇跡―』（水戸市立博物館、二〇二一年）

(7) 『池田家履略記』（岡山大学図書館池田家文庫、TAH160）を、国文学研究資料館の国書データベースで確認したところ、東照宮勧請の場面が、次のように列挙されていた（傍線は筆者が付した）。

（前略）  
御作事方  
（中略）  
一 鳥居隨身門仁王門惣門 村田弥兵衛  
一 鈴田夫兵衛  
一 丸毛七兵衛  
一 松島平兵衛

一 冊  
一 絵書彩色 横目 野間八郎左衛門  
一 塗師道具諸取総手へ渡す奉行 横目 小堀次郎左衛門  
一 飾屋道具諸取惣手江渡す奉行 同 稲川九郎左衛門

（後略）  
また、『岡山藩家中諸士家譜五音寄（2）』（岡山大学文学部、一九九三年）にある野間久右衛門の記録には、次のように記されている。

一 正保元年七月二 権現様御宮彩色奉行被 仰付 同十二月二仕廻申候  
以上のことから、野間八郎左衛門（久右衛門）が奉行となって、本殿等に彩色を施したことは間違いないだろう。また、「絵書」と書いてあり、そこに絵馬が含まれる可能性も残されている。なお、池田光政自身が書き、狩野探幽が彩色した三十六歌仙一帖が林原美術館に伝来している（林原美術館 橋本龍雪芸課長のご教示による）。

なお、令和七年一月二〇日に、玉井宮東照宮名譽宮司佐々木講治氏・禰宜佐々木浩之氏に三十六歌仙扁額について情報をお持ちではないかと伺ったが、それらの記録や口伝は残っていないとのことだった。

(8) 『東照宮御葺替正遷宮一件』(岡山大学図書館所蔵池田家文庫、P11204)。

一 東照宮御葺替根破損二付、御葺替被 仰付、

四月下旬方取懸り、五月中如故檜皮葺ニ

出来、尤箱・棟・千木・鞭木共御仕替、相調

但、檜皮葺ニて無之共、苦ケ間敷哉否之儀、

於江戸御留守居共植野表江内々ニ而承合

候処、檜皮ニ而無之而ハ難成趣ニ付、此度茂

其俣檜皮葺ニ被 仰付候也

六月十六日方正遷宮ニ付、諸事左之通

被 仰付

(9) 『金沢東照宮(尾崎神社)の研究』(金沢城史料叢書3、金沢城研究調査室、二〇〇六年)。本稿では、徳川家康の死後から一六五〇年までに造営され、報告書等でその存在が確認できる東照宮に限って記述した。そのため、私が管見できた範囲に限られることから、さらなる調査が必要である。

(10) 各地の東照宮の内部については、それぞれの神社のホームページで確認することができ。また、戦災で失われた場合においても、「戦災等による焼失文化財 建造物(霊廟・東照宮)篇」(文化財保護委員会、一九六五年)や「戦災等による焼失文化財」(戎光祥出版、二〇一七年)等で確認することができる。

(11) 『松江神社建造物調査報告書』(奈良文化財研究所、二〇二一年)によれば、松江東照宮は、寛永五(一六二八)年に堀尾忠晴によって造られた。その後、寛文元(一六六一)年に松平直政によって通殿・拝殿を増築され、権現造の形になったとある。

(12) 『特別展 紀州東照宮の宝刀』(和歌山県立博物館、二〇二四年)に掲載されている「太刀 銘 左近将監景依 正応二年十一月日」、「太刀 銘 光忠」(いずれも重要文化財)を指す。

(13) 山作良之「日光東照宮蔵三十六歌仙扁額製作の経緯」(『大日光』七九、大日光発行所、二〇〇九年)。山作氏の研究によれば、徳川秀忠から後水尾天皇に日光東照宮に奉納する三十六歌仙扁額へ宸筆を頂戴したい旨の申し出があり、それをきっかけに三十六歌仙扁額へ宸筆を頂戴したい旨の申し出があり、それになったことを指摘している。

(14) オレグ・プリミアニ「江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額の書」(『語学教育研究論叢三三』、二〇一六年)など、オレグ氏の研究を参照した。

(15) 註(4)。

(16) 註(6)及び、註(14)、『紀州東照宮の歴史』(和歌山県立博物館、一九九〇年)。

(17) 「絵書彩色」については、本殿等の内部に絵を描いたり、彩色を施したりした可能性も考えた。本稿では、何かが彩色されたという可能性を指摘するために、

あえて記述することにした。今後の課題としておきたい。

(18) 『玉井宮東照宮誌』及び令和七年一月二〇日の調査時の聞き取り。

(19) 備前東照宮の奉納物については、岡山城天守閣に寄託されている現品及び「玉井宮東照宮誌」をもとにまとめた。また、因幡東照宮については、鳥取県立博物館に寄託されている現品及び「江戸開府四〇〇年 東照宮展」(前期・後期、鳥取市歴史博物館、二〇〇三年)を参照した。また、建造物については、「重要文化財禰神本殿唐門拝殿及幣殿修理工事報告書」(重要文化財禰谿公園修理委員会、一九五六年)を参照した。

【謝辞】 本稿作成のきっかけは、平成二六年度に行った交流展『鳥取藩池田家三十二万石』(会期：平成二七年一月二一日～二月二一日)で、因幡東照宮へ奉納された甲冑と太刀を展示するにあたり、玉井宮東照宮所蔵の甲冑・太刀と似ていると感じたことでした。自身の転勤、新型コロナウイルスの蔓延等の困難が重なりましたが、今回、ひとまず調査をした結果を簡単にまとめたつもりです。

本稿作成は、所蔵されている貴重な品や、建造物を見学させていただいた玉井宮東照宮名譽宮司佐々木講治様、宮司佐々木祥之様、禰宜佐々木浩之様、そして、鳥取東照宮宮司長尾隆久様のご協力があつてのことです。この場を借りて、改めてお礼申し上げます。また、池田家については、常日頃より意見交換に付き合ってくれている伊藤康晴氏、来見田博基氏にも感謝いたします。

その他、大西泰正様、小野田伸様、岸本賢信様、原田莉沙子様、藤尾隆志様には、資料閲覧や情報提供等でお世話になりました。ありがとうございました。

表1 岡山東照宮の成立に関して

年	月日	できごと
寛永20(1643)年	不詳	池田光政が天海僧正を通して、家光に東照宮勧請について内々に尋ねる
寛永21年・正保1(1644)年	6月1日	天海僧正から東照宮勧請の内諾がある
	6月2日	大老酒井讃岐守（忠勝）の元へ池田光政が参上
		酒井から「軽く御造営然るべし」と言われる
	7月9日	造営を命ずる
	9月17日	神体開眼供養
	12月1日	神体を奉迎のための家臣が備前より出発
	12月17日	落成
正保2(1645)年	1月19日	神体が江戸を出発
	2月8日	神体が牛窓港へ到着。同日中に岡山城下へ移動
	2月16日	夜遷宮
	2月17日	本社で四箇法要執行
	2月18日	薬師如来開眼供養
	2月19日	拝殿で論議執行
	5月17日	東照大権現から東照宮となる

典拠：『池田光政公伝』『池田家履歴略記』『玉井宮東照宮誌』をもとに作成した。

表2 元和3(1617)年～慶安3(1650)年にかけて造立された主な東照宮の比較

	名称	完成		御大工	形態	奉納太刀	奉納甲冑	三十六歌仙	出典	備考
1	久能山東照宮	元和3	1617	中井大和守正清	複合社殿	○(重文)	○(重文)	○	久能山東照宮修理報告書	寛永期のものを移築。当初は、檜皮葺。
2	日光東照宮(創建時)	元和3	1617	中井大和守正清	複合社殿	○(国宝)		○	金沢報告書、とちぎデジタルミュージアム	
3	紅葉山東照宮	元和4	1618	中井大和守正清		○(重文)			金沢報告書	現存せず。
4	名古屋東照宮	元和5	1619	澤田若狭守吉次	複合社殿	○	○	歌仙色紙	金沢報告書	戦災で焼失。
5	水戸東照宮	元和7	1621	中島土佐元次、 同内匠助宗次、 同采女正家次、 同監物嶺次、 菊田主水金次	複合社殿	○(重文)	○(重文)	○(市指定)	金沢報告書	戦災で焼失。
6	和歌山東照宮	元和7	1621	中村讃岐守家次、 中村織部久長	複合社殿	○(重文)	○(重文)	○	金沢報告書、『特別展紀州東照宮の宝刀』	
7	日吉東照宮	元和9	1623		複合社殿			○	金沢報告書	現在の社殿は、寛永11(1634)年のもの。
8	金地院東照宮	寛永5	1628		複合社殿			○	金沢報告書	
9	松江東照宮	寛永5	1628		独立社殿 ※後に複合社殿		○(市指定)	○(市指定)	松江神社建造物調査報告書	
10	日光東照宮(寛永)	寛永13	1636	甲良豊後守宗弘 ほか	複合社殿	○(重文)	○(重文)	○	金沢報告書	銅瓦は承応3(1654)年の修理の際に交換したもの。
11	仙波東照宮	寛永17	1640	木原木工允義次、 名代鈴木彦左衛門、 杉本五左衛門	独立社殿			○(重文)	金沢報告書	銅瓦葺は後世の改変。当初は椽葺。
12	柴東照宮	寛永18	1641	木原木工允義次、 鈴木修理亮長恒	独立社殿				金沢報告書	戦災で焼失。
13	金沢東照宮	寛永20	1643	木原木工允義次	独立社殿			○(市指定)	金沢報告書	
14	世良田東照宮	寛永21	1644		独立社殿	○(重文)		○(県指定)	世良田東照宮HP	
15	備前東照宮	正保2	1645	木原木工允義次	独立社殿	○	○		金沢報告書、『玉井宮東照宮誌』	
16	滝山東照宮	正保3	1646	木原木工允義次、 鈴木修理亮長恒	独立社殿	○(重文)		○(市指定)	金沢報告書、岡崎市HP	
17	広島東照宮	慶安1	1648		独立社殿	○			『広島市史社寺誌』、 広島東照宮HP	昭和20年に原子爆弾により焼失。
18	因幡東照宮	慶安3	1650	木原木工允義次	独立社殿	○(県指定)	○	○(県指定)	金沢報告書	

【注】主には金沢城調査研究室『金沢東照宮(尾崎神社)の研究』P.3-13(出典では金沢報告書)、文化庁文化財データベース(出典では、文化庁DB)等を参考に作成した。  
なお、現時点で判明していない項目は、すべて空欄とした。

表3 備前東照宮及び因幡東照宮への奉納文化財一覧

	資料名	製作年	刃長	反り	目釘穴	拵え	指定区分	奉納者
備前	1 太刀 銘 大法師法橋来金道	寛永 21(1644) 年	82.7	1.3	1			池田光政
	2 太刀 銘 大法師法橋来金道	寛永 21(1644) 年	93.6	1.2	1			池田光政
	3 緋緘甲冑							池田光政
	4 絵書							池田光政
因幡	5 太刀 銘 信濃大掾藤原忠国	慶安 2(1649) 年	82.6	1.3	1	信濃大掾藤原忠国玉纏太刀式の太刀拵	県	池田光仲
	6 太刀 銘 信濃大掾藤原忠国	慶安 2(1649) 年	95.8	2	1	信濃大掾藤原忠国第一太刀式の太刀拵	県	池田光仲
	7 太刀 銘 信濃大掾藤原忠国	慶安 2(1649) 年	85.3	2.5	1	信濃大掾藤原忠国鍔剣（飾太刀）拵	県	池田光仲
	8 太刀 銘 伯耆国倉吉住人播磨大掾藤原正綱	慶安 3(1650) 年	105.3	1.6	1	伯耆国倉吉住人播磨大掾藤原正綱	県	
	9 三十六歌仙額（狩野探幽作）	慶安 3(1650) 年					県	池田光仲
	10 金小札朱糸威胴丸具足	江戸時代初期						池田光仲



写真1：太刀1



写真2：太刀2 いずれも令和2（2020）年5月20日撮影。



写真4 裏銘



写真3 表銘

いずれも、太刀 2 を令和 7 (2025)年12月24日撮影。



写真6 太刀1の金具アップ



写真5 太刀1の飾りアップ



写真8 太刀2の金具アップ



写真7 太刀2の飾りアップ



写真9 太刀袋のアップ

いずれも令和7(2025)年12月24日撮影。



写真10：緋緘甲冑（佐藤寛介氏撮影）

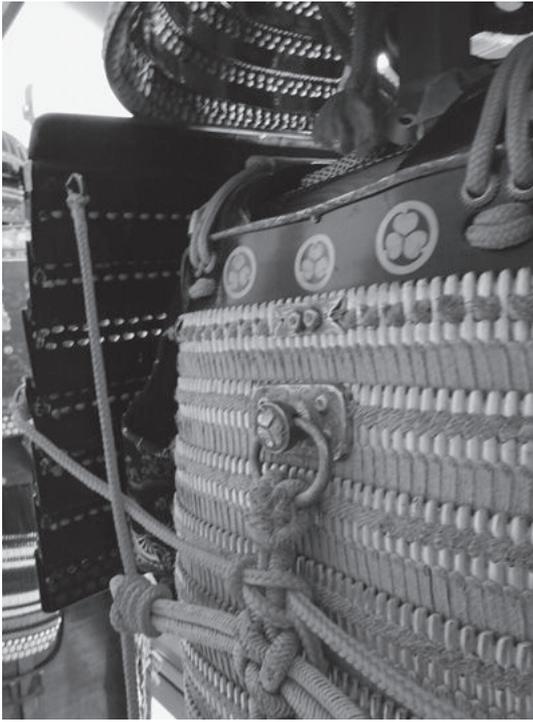


写真12 背面



写真11 兜前面



写真14 大袖上部



写真13 喉輪下部及び胴上部

いずれも令和2(2020)年5月20日撮影。

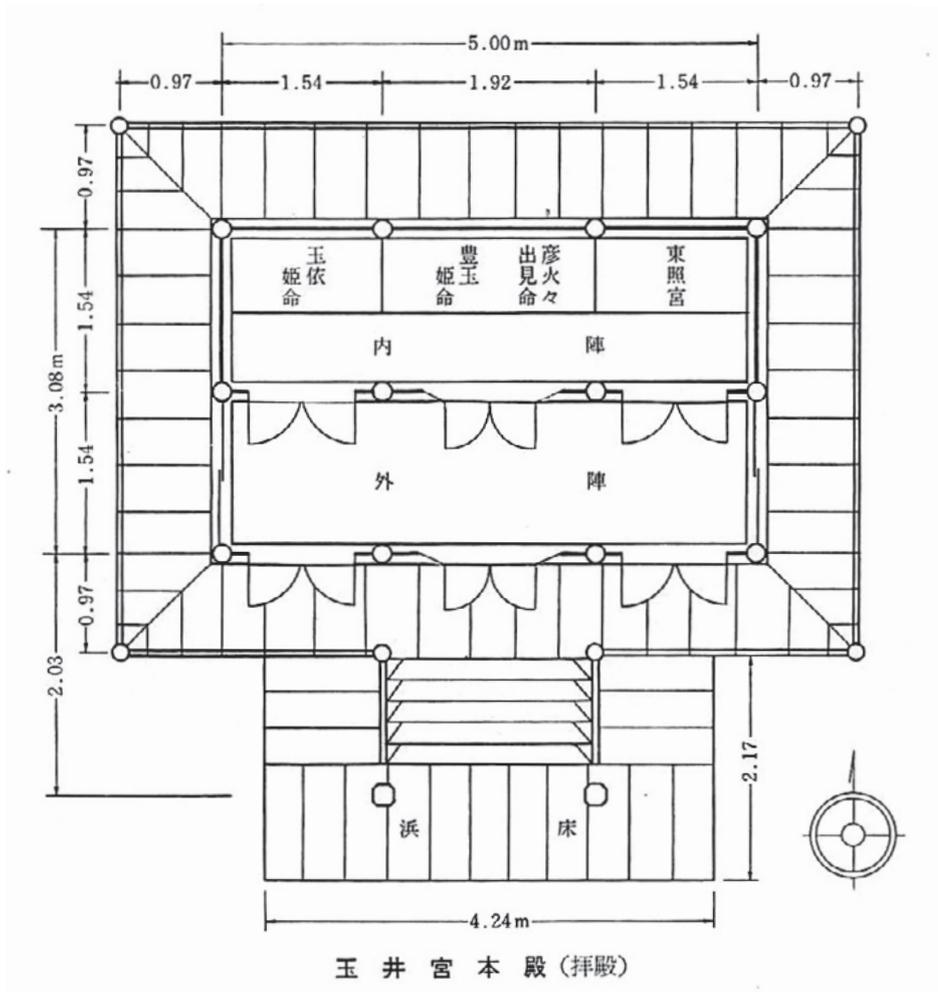


图 1：岡山東照宮本殿平面図

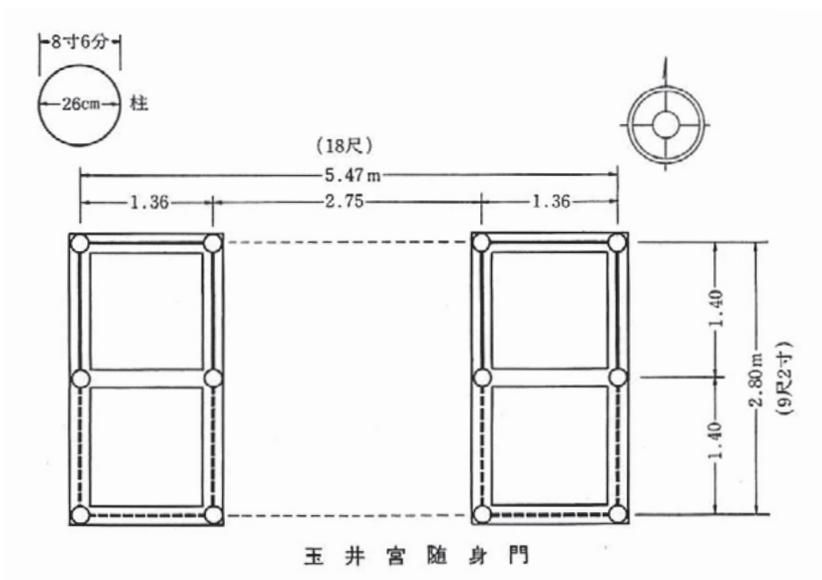


图 2：備前東照宮隨身門平面図

いずれも『玉井宮東照宮誌』より転載。



写真15：備前東照宮本殿(側面より撮影)



写真16：備前東照宮随身門

いずれも令和2(2020)年7月28日撮影。



写真17：鳥取東照宮本殿(側面より撮影)



写真18：鳥取東照宮随神門

いずれも令和元(2019)年8月30日撮影。

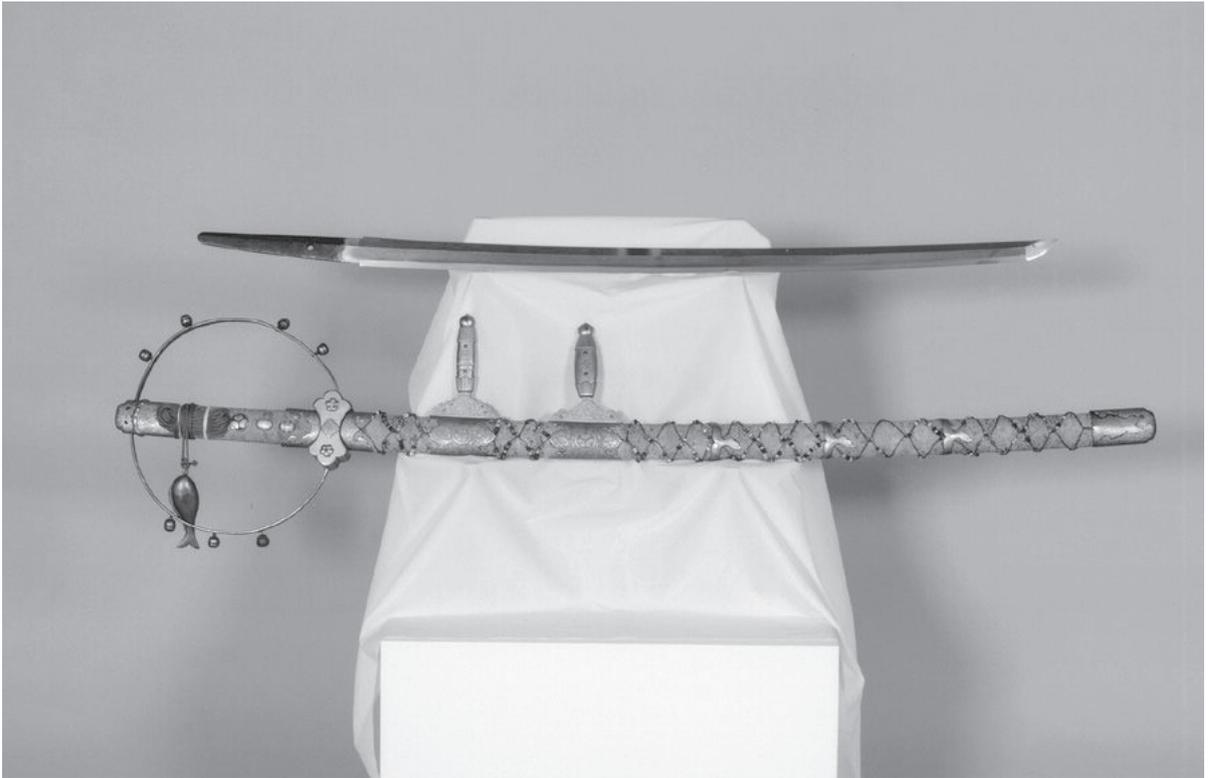


写真19：信濃大掾藤原忠国玉纏太刀式の太刀拵(鳥取県指定保護文化財)  
【写真提供】鳥取県立博物館



写真20：太刀の金具部分のアップ。  
平成26年度交流展「鳥取藩池田家32万石」展示中に撮影。



写真21：金小札朱糸威胴丸具足  
【写真提供】鳥取県立博物館

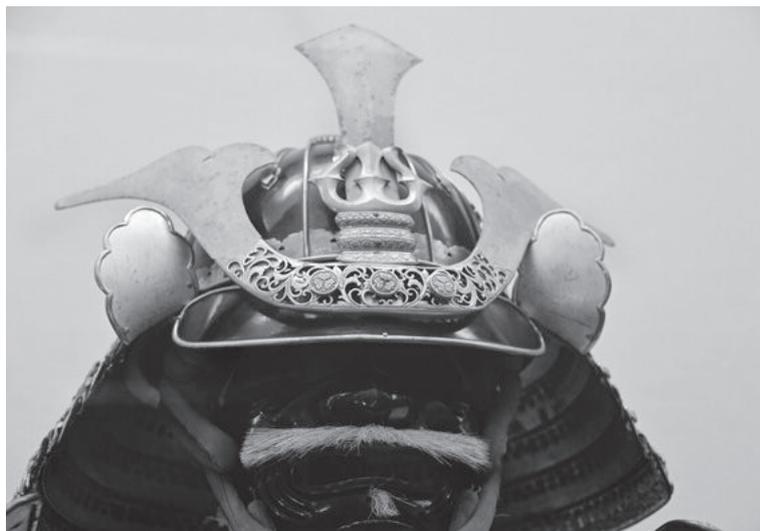


写真22：金小札朱糸威胴丸具足(兜アップ)  
平成26年度交流展  
「鳥取藩池田家32万石」展示中に撮影。



## 執筆者紹介

内 池 英 樹  
岡山県立博物館 副館長（学芸課長事務取扱）

重 根 弘 和  
岡山県立博物館 学芸員

---

### 岡山県立博物館研究報告 第46号

発 行 日 令和8（2026）年3月6日

編 集 発 行 岡山県立博物館  
〒703-8257 岡山市北区後楽園1-5  
☎086-272-1149

印 刷 株式会社中野コロタイプ  
〒701-2142 岡山市北区玉柏390

---

ISSN 0387-3676